

# 日本社会史研究

102号

日本史学史における社会史研究(2)

—一九六〇年代の日本社会史—

夏目琢史

大震災 医療費の無料化 ベトナム戦争

日米同盟 隕石

## 日本史学史における社会史研究(2)

—一九六〇年代の日本社会史—

### 夏目琢史

#### はじめに

筆者は、前稿「日本史学史における社会史研究(1)」において、戦前の日本社会史研究の系譜を追い、社会史という潮流が、社会学や経済学、政治学など歴史学の周辺学問のなかで生まれてきたこと、社会史が時代区分を相対化させていく試みであったことなどを明らかにした上で、少なくとも社会史研究には史学史上三つの流行点があった点をすでに指摘している<sup>(1)</sup>。本稿では、前稿に引き続き一九六〇年代のいわゆるマルクス主義歴史学(戦後歴史学)の絶頂期において、社会史研究がどのように取り組まれてきたのかについて、ほぼ同時期に起こった地域史研究の活性化とその史学史上の意味なども合わせて考えてみたい。

六〇年代は、一般に日本社会史研究の空白期と見なされる。この時期の歴史学は、マルクス主義歴史学が主流であり(いわゆる、戦

後歴史学と呼ばれるが、六〇年代にはすでにこれに与さない研究が生まれ始めていた)、権力・被権力、民衆の対抗運動などに関心が集中していたことは周知の事実であろう。経済史研究が活発となりウクライド論などが大きな論争となっていた。こうしたなか、いわゆる個人の心性(思想)などは、主要な研究対象としては表舞台に上らなかつたといつてよいだろう。これは、六十年安保闘争の影響が大きく<sup>(2)</sup>、個人の力量や社会における主体については、過小評価される傾向にあつた(もちろん、こうした背景に戦前・戦中の人物偏重の歴史叙述に対する深い反省があつたことを忘れてはならない)。

こうしたなかで、社会史研究は少なくとも二つの方向で行われるようになったと思われる。ひとつは、マルクス主義歴史学の影響を全面に受けた社会構成史研究としての社会史研究、今一つは、地域や郷土の生活史に着目した地域史研究である。両者は、一見すると社会史研究とは相反するものに見受けられるが、その実、社会史研究としてのエッセンスを十分に充たしていたと考えられる。すなわち、社会構成史研究はいうまでもなく全体史の構想であり、マルクス主義歴史学(唯物史観)を下敷きにしており、筆者の定義する社会史研究と極めて親和的である。筆者のいう社会史研究とは、政治

史・経済史・文化史のいずれとも異なり、人間のおりなす多種多様な社会システムや関係構造を明らかにすることを目的としたものであり、社会学や民俗学などの周辺領域の成果を取り入れ、なおかつ時代区分論を意識的に再構築する点に特徴がおかれるものであった。社会構成史研究の視点や、地域や郷土の生活史・社会相に注目した研究のいずれも、この定義の範疇のうちにあると考えられる。以下、それぞれ具体的に見ていくことにしたい。

### (1) 社会史からみた社会構成史研究

社会構成史と社会史の相違について、戦後歴史学の申し子である安良城盛昭は次のように説明している。

「歴史学は、人間の歴史の営みを、そのさまざまな側面に焦点をあてて解明しようとする学問なのだが、大掴みにいって、①経済②社会③思想④宗教⑤文化⑥民族⑦国家（法と政治はこの理解では②と⑦に含まれる）といった区分にもとづいて研究してきたと私はみなしている。この①～⑦についての歴史研究は、人間の歴史の部分史といえるが、これらの部分史を総括して、人間の歴史を総体として把握するのが社会構成史である、と私は理解する。（中略）最近流行の社会史研究が、ややもすれば社会構成史研究と切り離されて、糸の切れた根無し草の離れ風のように空中を乱舞している状況は、速かに是正される必要がある。」<sup>(3)</sup>

安良城の理解では、八〇年代に流行した社会史研究は、いわば部分史であり彼の構想する社会構成史より低次のものだという。永原慶二<sup>(4)</sup>や佐々木潤之介<sup>(5)</sup>も安良城とほぼ同様の理解を示しており、こうした考え方が戦後歴史学を牽引した歴史家たちになかば共

通にみられるものであったことがわかる<sup>(6)</sup>。要するに、社会構成

史研究をめざした学者たちは自分たちの研究を社会史としては意識

していなかった。というよりも、戦前の社会史と自分たちの研究視

点を明確に分けている感が強い。しかし、その研究スタイル自体は、

戦前から続けられてきた社会史研究にかなり近いものがあつた。当

時（六〇年）東京大学社会科学研究所の助教授であつた安良城は、

五〇年代から継続してきた太閤検地論、地主制論を進め、古代律令

制を「アジア的相対的奴隸制」、中世荘園制を「家父長制的奴隸制」、

近世幕藩制を「農奴制」と明確に位置づけていった。この理解に対

し、六〇年代には本質的な反論がいくつも出されていくことになつ

たが、古代～近現代にわたる安良城の一連の学説（社会構成史研

究）は、歴史学全体に大きな影響を与えることになった。安良城説

のうち、下人を奴隸制とする理解を鋭く批判した大阪大学文学部助

教授の黒田俊雄は、権門体制論（一九六二年）という中世国家を武

家・公家・寺家による相互補完的な支配システムと理解し、各方面

に大きな影響を与えた<sup>(7)</sup>。当時（一九六三年）すでに一橋大学経

済学部教授だつた永原慶二も『日本の中世社会』（一九六八年）<sup>(8)</sup>

を発表した。永原はこの著書のなかで、中世前期を規定した荘園制

は、農民的土地所有権としても、在地に成長した在地領主の土地所

有権としても未成熟で不安的なものであつたとし、荘園制＝日本に

おける封建制社会の本格的展開の前段階に位置づくものであると捉

えている。同じく一橋大学の助教授の佐々木潤之介も『幕末社会

論』（一九六九年）<sup>(9)</sup>を刊行する。同書は、維新时期変革の推進主体

としての役割を背負わされた半プロレタリアの小農回帰が世直しの

基本となつたと理解し、豪農はこれと対決する方向で政治主体と結

んでいったとした。これらはそのタイトルからも明らかのように、それぞれ社会の変革点に注目するものであった。

六〇年代に活躍した神戸女子薬科大学助教授（六四年当時）の戸田芳実や、北海道教育大学助教授の阿部猛、八代学院大学助教授の河音能平、熊本大学講師の工藤敬一らによる荘園史研究は、民衆の生活文化の解明をさまざまな角度から行ったものであり<sup>(10)</sup>、やはりその分析対象は、「社会」に置かれていた。彼らが本格的に自身の研究を「社会史」と位置付けていくのは、七〇年代のことであるが<sup>(11)</sup>、その研究の礎はこの時期（六〇年代）につくられたものであった。こうした見解は、一見すると、経済史や政治史、文化史のいずれでもない雑多な研究を「社会史」と称しているように見えるが、これらの研究はいずれも世界史の基本法則の点検が企図され、つねに全体史が意識されていたように思われる。それは、上記の論者たちが、社会システムの「成立」過程を主な研究対象とし、時代区分論を活発に議論してきたことに示されている<sup>(12)</sup>。

一方、この時期に還暦をむかえた東北大学経済学部教授の中村吉治は、自身の研究を「社会史」としてまとめいく<sup>(13)</sup>。中村の基本的な理解については前稿で論じたのでここでは割愛するが、六〇年代の研究は、個人を超越し、ときには共同体規制として個人を拘束し、ときには国家権力を凌駕していく社会というものへの関心が共通してみられた。このほかにもマルクス主義歴史学の欠陥を指摘し「社会史の法則」を探究した中京大学法学部教授の澤登佳人<sup>(14)</sup>、「思想の社会史」を追究した哲学者の宮島肇<sup>(15)</sup>なども、基本的には同様の理解にたつものであった。

いわば、この時期の歴史研究は、社会実在論的な理解が先行され、

個人の役割を意図的に低くみなした。その点で今日の社会史研究（といわれるもの）とは全く異なるものの、戦後歴史学の根幹には、社会史研究としての性格が多分に存在していたといえよう。これは思想史研究においても例外ではなく、当時名古屋大学文学部講師であった尾藤正英も、思想史研究を試みるなかで、思想を「社会的な機能をもつ一種の力」として捉え、「思想の社会的意義」を追究している<sup>(16)</sup>。思想を論じるにあたっては、その社会への影響力（尾藤は「社会史的位置」とする）を論じる必要性がどうしても存在したのである。

なお、この時期、遠山茂樹は、『戦後の歴史学と歴史意識』（一九六六年）を執筆。国民教化のための歴史教育について厳しい批判を展開したが、この著書のなかで「民族の問題は、また歴史学と社会Ⅱ政治との関係についての視野をひろげた」とし、国民大衆がこれまでの啓蒙される側ではなくて歴史の主体となってきたことなどを論じている<sup>(17)</sup>。六〇年代における社会史研究、とくに庶民生活史への関心の高まりは、まさに国民が歴史学に主体的にかかわる時代が到来してきたことに影響されていると考えられる。

## （2）地域史と社会史研究

一九六〇年代は、いわゆる地域博物館が全国で建設され始めた時期であり、地域史研究が注目されるようになった。とくに近世村落史研究では、当時東京大学農学部教授であった古島敏雄らによって農村調査の結果が多数報告された。古島は、五〇年代に『日本農業史』（一九五二年）などの地域史研究の方法論を確立した名著をのこしたが、六〇年代にも『土地に刻まれた歴史』（一九六七年）<sup>(18)</sup>

などを上梓し、農村調査研究および地域史研究の方法論と理論を整備していった。一方、敗戦まだまもない一九四九年に『近世農村生活史』を発表した学習院大学文学部教授の児玉幸多も、六〇年代、同大学経済学部教授であった大石慎三郎とともに『近世農政史料集』を刊行している<sup>(19)</sup>。大学アカデミズム以外からも、日本社会党出身で当時衆議院議員であった稲村隆一の『日本農村社会史』(一九六九年)<sup>(20)</sup>もこの時期に農村問題を扱ったものであった。当時明治大学の助教授であった木村礎も、フィールドワークを丹念に行い『近世の新田村』(一九六四年)などを刊行。村のふつうの人々の日常的生活史を描き出すことの重要性を説いた。また、この時期の地域史研究として、とくに重要なのが、仏教大学教授であった竹田聴州の村落寺院論である。竹田は、『近世仏教・史料と研究』創刊号(一九六〇年)で次のような提言をしている。

「今日我々がまずしなければならないことは、一切の先入観と絶縁し、寺院がそれを囲む都鄙の地域社会の生活と具体的にどのような機能連関を有し、又それがどのような意味をもっているか、更にそうした機能連関をもつことが寺院ないし宗団の存在形態・内部構造と相互にどのように規制し合っているか、これらをどこまで客観的・科学的に精査することであろう。」

こうして、七〇年代になると、竹田は民俗仏教についての実証を深めていくが、その方法論は紛れもなく社会史であったといえるだろう。東京教育大学の助教授であった森岡清美の『真宗教団と「家」制度』(一九六二年)<sup>(21)</sup>、日本社会事業大学教授の吉田久一『日本社会事業の歴史』(一九六〇年)、『日本近代仏教社会史研究』(一九六四年)<sup>(22)</sup>、群馬大学学芸部教授の相葉伸『不受不施的

思想の史的展開』(一九六一年)<sup>(23)</sup>、立正大学助教授の高木豊『日蓮とその門弟—宗教社会史的研究』(一九六五年)<sup>(24)</sup>など、社会連関(機能論)を意識した広義の社会学の影響を受けた研究がこの時期、近世史のなかで活発になり始めた。東京都立航空工業専門学校助教授の南和男『江戸の社会構造』(一九六九年)も、江戸社会の構造分析を通してその変質に対応する幕府の諸対策を統一的に論じようとした先駆的な業績であったし<sup>(25)</sup>、早稲田大学商学部教授の工藤恭吉による『幕末の社会史』(一九六五年)もこの時期に発表されたものであった<sup>(26)</sup>。東京大学法学部教授の石井良助が、『江戸時代漫筆』(一九六一年)、『江戸の刑罰』(一九六四年)、『はん』(一九六五年)、『江戸の離婚』(一九六五年)、『吉原』(一九六七年)などを執筆していくのもこの時期であった。

かつて中世史家平泉澄が論じたアジールについても、この時期、近世史学界のなかでは活発に進められていった。東京大学史料編纂所教授であった伊東多三郎の「近世における政治権力と宗教的權威」(一九六〇年)<sup>(27)</sup>、群馬県立吾妻高等学校長であった五十嵐富夫の『縁切寺の研究』(一九六七年)<sup>(28)</sup>、東京大学史料編纂所の阿部善雄による『駆入り農民史』(一九六五年)<sup>(29)</sup>、秀村選三「幕末期薩摩藩におけるアジールの痕跡」(一九六四年)<sup>(30)</sup>、これらは社会(共同体)から逸脱したマイノリティに注目した選れた成果であり、社会史としての側面が強くみられるものであった。

なお、この時期にまたひとつ大きな影響をもったのが、すでに日本学会議員を勤めていた羽仁五郎による『都市の論理』(一九六五年)である。周知のように羽仁は、この著書のなかで自然発生的で曖昧な「地域社会」という概念を退け、「自治体」を研究対象とし

て遡上させた。羽仁のこの著作は、都市自治体の歴史に変革の萌芽を見ようとしたもので、きわめて政治的アジテーションの側面が強かったが、後に流行する地域社会研究において重要な意味をもつものであった。また一方で、六〇年代はいわゆる日本の高度経済成長の「成功」に所以した「近代化論」も台頭し、梅棹忠夫による『文明の生態史観』（一九六七年）も発表された。日本社会論や文化論が流行し（たとえば、中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社、一九六七年）、「社会」を論じる視点が、無意識のうちに高まりを見せていたということができよう。

なお、(1)で触れたように、この時期は荘園史研究が活発で、今や古典とされた石母田正の『中世的世界の形成』清水三男の『日本中世の村落』を指針に、多くの個別荘園の成果が発表された。東京都立北園高等学校教諭であった網野善彦の『中世荘園の様相』（一九六六年）も、その代表的な一つであった。網野のこの著書は、個人とそれを超越する実在である「時代」との関係を見事に描写した優れた歴史叙述であり、後に「社会史」と称される網野の方法論の萌芽をみることができ(31)。こうした地域史研究の流行は、柳田国男らの民俗学とは一定の距離をとりながら進められてきたように思われる。しかし、当時（一九六五年）すでに日本女子大学の学長であった有賀喜左衛門の家族論・社会史研究(32)や、東京教育大学教授の和歌森太郎による歴史学と民俗学の方法論的研究(33)などは、両者の橋渡り的な役割を少なからず果たしてきた(34)。なお、この時期の動きとして忘れてはならないのが、平凡社による『日本残酷物語』（一九五九〜六一年）の刊行である。この著作集は、周知のように民俗学者の宮本常一と作家山本周五郎が監修したもので

あり、日本社会の影の部分で民俗学の視点から次々と明らかにされた。これは「大きな社会」（マジョリティ）に対する「小さな社会」（マイノリティ）に焦点をあてたものであったが、地域史同様、全体史に対抗的にあらわれる「社会史」を論じたものである。生活・文化の問題については、この時期に刊行された『岩波講座 日本歴史』のなかでも、取り上げられている。たとえば、宮本常一は『民衆生活様式の変遷』を論じ、洞富雄と愛知大学教授の玉城肇は、「結婚・恋愛・性」の問題を、時代の変遷に留意しながら論じた(35)。こうした研究潮流のなか、色川大吉の『明治精神史』（一九六四年）(36)、鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』（一九六九年）(37)、安丸良夫の通俗道徳論（一九六五年）(38)など、新たな歴史学の動向が生まれる。これらは「精神史」「秩序意識」「通俗道徳」など、底辺民衆の思想に着目する、いわゆる「民衆思想史」研究であった。一方、地域史・郷土史の研究でも、「社会史」という概念が積極的に用いられるようになってきた。高知大学教育学部講師の平尾道雄は、土佐の郷土史研究を進めるなか、著書『近世社会史考』（一九六二年）を発表(39)。近世身分制度の埒外におかれる宗教人や浪人、医師、四国遍路に注目し、「きびしい人間生活のなやみ」や「社会の現実的な批判やおきて」を解明しようと試みた。大阪大学経済学部教授の宮本又次も編著『藩社会の研究』（一九六〇年）のなかで「藩社会」という語を用い、分析を試みている。郷土史研究のなかでも、いわゆる「社会相」「社会史」についての基礎的な研究の積み重ねが行われた。茨城県立水海道第一高等学校講師の今井隆助は『猿島の郷土史』（一九六五年）のなかで江戸時代の「世相」を扱っているし(40)、鳥取県東伯郡三朝町の『三朝町誌』では、

「社会史」という項目を立て、明治以降の「世相の動き」を論じている<sup>(41)</sup>。また、前橋市立図書館長の萩原進による『群馬県遊民史』（一九六七年）も、やくざと武士の発生を「社会史的」に検討したものであった<sup>(42)</sup>。こうした郷土史研究・地方史研究のなかでも、『愛媛資本主義社会史』の成果は極めて重要である。ここでは「地域社会史」が提起された。これは「政治史」・「経済史」・「文化史」とよばれている歴史学の各研究領域が、地域社会史のなかで、すべて生かされ結合させられる<sup>(43)</sup>べきであり、「民族社会（国家）や人類社会（地域世界・全世界）の科学的総合的研究の基軸となるべき地域社会の科学的総合的研究の重要な根拠となる歴史的研究——それが地域社会史である」とされた<sup>(43)</sup>。このほかにも、郷土史研究の団体が各地で組織された。東京の足立区でも一九六八年に「足立史談会」が発足。以降、勝山準四郎、福島憲太郎、安藤義雄ら郷土史研究者らによって、雑誌『足立史談』が毎月発表され続け、今日にいたっている。

こうした郷土史研究は、当時流行していたマルクス主義歴史学とは異相が違い、地域住民の生活や文化に焦点が当てられたものであり、歴史学・民俗学・文学・美術・考古学などの分け隔てない学際的な性格と社会史的な着眼点を有していたといえるであろう。このように自治体史や郷土史においても、社会史の概念（もしくはそれに類する方法論）が積極的に用いられていた。とくに大きかったのは、各地に登場したいわゆる地域博物館の存在であった。博物館を核として、各自自治体での史料収集活動が活発に行われるようになり、地域史研究を下支えしていくようになる。それは、地域に生きる人々の過去への探究という課題を要請するものであり、民俗学と

歴史学などの隔てのない新たな地域社会研究を切り開いていくきっかけにもなった。

当時早稲田大学教授であった洞富雄は、この頃、高群逸枝・赤松俊秀・塩沢君夫と論争を繰り返して、「家の発展」の歴史を追究していたが、著書『庶民家族の歴史像』（一九六六年）のあとがきの中で、次のように論じている。

「被支配者層としての一般民衆の生活史を究明しようというのが、旧著以来私の社会史研究の指針であった。庶民の社会には、支配者層のそれとはちがった、独自の生活史の流れがあったことはいうまでもない。私はこの点におもいをひそめて、庶民家族史という視点から対象に迫ろうとしたのであるが、資料の制約もあって、はたしてそれに成功しているかどうか、この点は、読者の判定にまたなければならぬ。」<sup>(44)</sup>

洞の分析視点が、支配者層といういわば上からの歴史ではなく、庶民層の生活を明らかにすることに主眼が置かれており、なおかつそれを「社会史研究」と理解していることがここからうかがえる。こうした考え方は、この頃存在感を増してくる地域史研究と共通する点が多かったと考えられる。

以上のように、一九六〇年代の社会史研究は、表だって活発な議論をよんだとまではいえないが、基層部分では実に多くの研究が発表されていたと評価してよいだろう。六〇年代は、歴史学の担い手の裾野が広がったことにもない、歴史学から社会をみる視線も多様化した。とくに、それらの研究は、アカデミックや民間歴史学に関わらず、日本社会の歴史と西洋のそれとの異質性をつよく意識したものであり、さらに社会に対する個人の役割を軽視する側面が

強かった（西洋Ⅱ個人主義という点で通底する）。多くの研究者は、思想や個人の考えを歴史学の対象として浮上させることを深く戒め、経済構造や社会集団構造が専ら検討の対象とした。いわば、社会が所与のものとされておき、この点がゼロ年代以降の歴史研究の課題とされるようになっていく。

戦後歴史学は、マルクス主義歴史学が前提とされていたわけではない。それは一つの研究の基軸であつて、そこから離れた一つの歴史理論の構築が目標とされたのであつた。つまり、グランドセオリーの消失とは、五〇〜六〇年代に敷かれた一つの命題から予定調和的にあらわれてくるものであり、むしろ戦後歴史学の一つの到達点といえるだろう。戦後歴史学に一区切りがついた大きな理由の一つには、社会を論じる術とその意味が、現実社会の多様化によって失われたことが大きく影響したのではないだろうか。いずれにせよ、六〇年代もまた日本社会史状況といふことができるであろう<sup>(45)</sup>。

### おわりに

一九六〇年代は、日本人の生活文化が大きく変転した時期であつた。高度経済成長期とされるこの時代は、新幹線や高速道路が次々に設置され、テレビ局も相次いで開局。スポーツや芸能で数多くのヒーローが登場した。その一方、安保闘争をはじめ、全共闘の運動の激化。公害などの社会運動や社会問題などの側面での話題に事欠かなかつた。急速な社会の変化は、まさに社会を記録することの大切さを研究者に迫ることになった。地域史・郷土史研究の進展はその典型であり、本稿で述べた歴史学者による意識的・無意識的の双方の社会史研究はまさにその影響によるところが大きい。一九七〇

年代に流行するフランス・アナル流の社会史研究所とは異質な、日本の歴史学アカデミズムが独自に鍛えてきた社会史研究の灯火がそこにはあつたと考えられる。しかし、一九七〇年代の日本社会が、歴史学に期待したものは、それとはまた違うものだった。これについては、別稿を用意させていただきたい。

（足立区立郷土博物館専門員）

### 註

(1) 拙稿「日本史学史における社会史研究(1)」『日本社会史研究』一〇〇号記念誌、二〇一二年。

(2) 遠山茂樹は、六十年代の歴史学界の置かれた状況を次のように述べている。「六〇年以後の歴史学と歴史教育は、研究者・教育者にあつても、国民にあつても、歴史意識の発展の仕方の不均等性、多様性が一層拡大したのが特徴である。現実の提起する課題をどう把握するか、現実自体がまだ帰趨を明らかにできない流動状態であるだけに、意識の性格を単純に規定できない。国内では安保闘争以後の革新の側での政治的・思想的混乱、国際的には中ソ論争に代表される社会主義国内部の対立の増大、そうしたことが、研究者・教育者の問題意識に分散の情況をもたらした。」『戦後の歴史学と歴史意識』岩波書店、二〇〇一年（初版は一九六八年）、一四・一五頁。

(3) 安良城盛昭「歴史研究に占める社会構成史研究の地位」『天皇・天皇制・百姓・沖繩』吉川弘文館、一九八九年。

(4) 永原慶二『二〇世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、二〇〇三年）。

(5) 佐々木潤之介「思想の言葉」〔『思想』六六三号、一九七九年〕、同『社会史』と社会史について〔『歴史学研究』五二〇号、一九八三年〕。

(6) ちなみに、朝尾直弘は、一九六五年に近世を独自の社会構成体(中世・近代に従属するものではなく)として見直す必要があるとして、「日本近世史の自立」を唱えている〔『日本史研究』八二号、一九六五年〕。

(7) 黒田俊雄「中世の国家と天皇」〔岩波講座 日本歴史6 中世二〕岩波書店、一九六三年。

(8) 永原慶二『日本の中世社会』(岩波書店、一九六八年)。

(9) 佐々木潤之介『幕末社会論』(塙書房、一九六九年)。

(10) 戸田芳実『日本領土制成立史の研究』(岩波書店、一九六七年)、阿部猛『日本荘園成立史の研究』(雄山閣、一九六〇年)、河音能平『中世封建制成立史論』(東京大学出版会、一九七一年)、工藤敏一『九州庄園の研究』(塙書房、一九六九年)。とくに戸田はマルク・ブロックの『封建社会』から農村社会史論の方法的な枠組みを学び、展開している。

(11) 阿部猛『中世日本社会史の研究』(大原新生社、一九八〇年)、同『中世社会史への道標』(同成社、二〇一一年)、戸田芳実『初期中世社会史の研究』(東京大学出版会、一九九一年)など。  
(12) 当時の時代区分論については、遠山茂樹・永原慶二「時代区分論」〔岩波講座 日本歴史22〕(別巻1、岩波書店、一九六三年)に詳しい。

(13) 中村吉治『体系日本史叢書8 社会史1・2』(山川出版社、一九六五年)、同『日本社会史』(山川出版社、一九七〇年)。

(14) 澤登佳人『社会史の法則』(風媒社、一九六九年)。

(15) 宮島肇『近代思想の社会史』(法律文化社、一九六五年)、同『戦後思想の社会史』(法律文化社、一九六八年)など。

(16) 尾藤正英『日本封建思想史研究』(青木書店、一九六一年)。

(17) 遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』(岩波書店、一九六八年)。同書に対しては、立命館大学の講師であった松浦玲の書評がある〔『世界』二七七号、一九六八年〕。

(18) 古島敏雄『土地に刻まれた歴史』(岩波書店、一九六七年)。

(19) 児玉幸多・大石慎三郎『近世農政史料集』1・2(吉川弘文館、一九六八年)。

(20) 稲村隆一『日本農村社会史』(日本農村社会史刊行会、一九六九年)。

(21) 森岡清美『真宗教団と「家」制度』(創文社、一九六二年)

(22) 吉田久一『日本社会事業の歴史』(勁草書房、一九六〇年)、

同『日本近代仏教社会史研究』(吉川弘文館、一九六四年)。

(23) 相葉伸『不受不施的思想の史的展開』(講談社、一九六一年)。同書は宗教社会学の側面も強く、「不受型信仰の実践形態―僧俗規範の社会史的形成―」、「宗論の社会史的基盤」等の章立てもみられる。

(24) 高木豊『日蓮とその門弟』(弘文堂、一九六五年)。

(25) 南和男『江戸の社会構造』(塙書房、一九六九年)。

(26) 工藤恭吉『幕末の社会史』(紀伊国屋書店、一九六五年)。同書「書名は紀伊国屋書店出版部の意嚮」というが、「歴史上におけるある政治家の役割に注目しこれを評価しようとする場合、彼の性格や才幹のもつ重要さを知ると同時に、彼を支えている



社会経済的な構造—それは他ならぬ多数の人間の意志の交錯のなかで作られ、一個の人間の恣意では改変できない内容をもっている—がいかなるものであり、それをどう方向づけるべきか(後略)に注目する必要があると述べており、やはり社会史の方法論の系譜をひくものであったと考えられる。

(27) 伊東多三郎「近世における政治権力と宗教的権威」『国民生活史 研究』第4、吉川弘文館、一九六〇年。

(28) 五十嵐富夫『縁切寺の研究』(西毛新聞社、一九六七年)。

(29) 阿部善雄『駆入り農民史』(至文堂、一九六五年)。

(30) 秀村選三「幕末期薩摩藩におけるアジールの痕跡」『経済学研究』三〇—一、一九六四年、のち『幕末期薩摩藩の農業と社会』創文社、二〇〇四年所収)。

(31) 拙稿「平泉澄と網野善彦」(阿部猛・田村貞雄編『明治期日本』の光と影』同成社、二〇〇八年)。

(32) 有賀喜左衛門『有賀喜左衛門著作集 第七 社会史の諸問題』(未来社、一九六九年)。とくに第五部「村落史と地方文化の意味」では、村落史研究の重要性を指摘している。

(33) 和歌森太郎『歴史と民俗と』(人物往来社、一九六七年)。

(34) この時期の社会学の側からの社会史研究としては、見田宗介『近代日本の心情の歴史』(講談社、一九六七年)などが発表された。

(35) 『岩波講座 日本歴史23』別巻2 (岩波書店、一九六四年) 所収。

(36) 色川大吉『明治精神史』(黄河書房、一九六四年)。

(37) 鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』(筑摩書房、一九六

九年)。

(38) 安丸良夫「日本の近代化と民衆思想」『日本史研究』七八・七九号、一九六五年、のち『日本の近代化と民衆思想』青木書店、一九七四年所収)。

(39) 平尾道雄『近世社会史考』(高知市立市民図書館、一九六二年)。

(40) 今井隆助『猿島の郷土史』(一九六五年)。

(41) 『三朝町誌 正』(三朝町、一九六五年)、三三三—三七八頁。

(42) 萩原進『群馬県遊民史』(上毛新聞社、一九六七年)。「第一章 社会史的に見たやくざと武士の発生」など。

(43) 近代史文庫編(代表 篠崎勝)『愛媛資本主義社会史 第一巻』近代史文庫、一九六八年、三二頁。

(44) 洞富雄『庶民家族の歴史像』(校倉書房、一九六六年)、二六四頁。(9)

(45) 一九六〇年代の幕末から明治を対象とした「社会史」研究に関する文献については、『明治維新史研究講座』別巻(平凡社、一九六九年)のなかに一覧が見える。これは狭義の「社会史」であり、本稿で扱った社会史はより広義のものである。